

第百十九話 建艦競争、消耗戦そして海軍消滅

米国との衝突の可能性が高まり、ワシントン及びロンドンの海軍軍縮条約が失効すると日米を含む列強は、夫々の思惑の下海軍力の建設に邁進した。シーソーゲームは開戦まで続いた。開戦後は建艦と損耗を繰り返しつつ、最終的には国家の国力によってその帰趨が決まる。日本海軍は果たしてどうだったのか、日本はそのような消耗戦に耐えられる国だったのだろうか？

1 日米開戦前の建艦競争

1936年末、日本の脱退宣言によりワシントン条約は失効し、ロンドン会議からも脱退し、以後世界は無条約状態となった。

- ・日本 1937年 第三次海軍補充計画(③計画) (目玉は超弩級戦艦「大和」「武蔵」)
- ・米国 1938年 第二次ヴィンソン案 (海軍力25%増強案) 既存
計画との合計では日本の4倍に！
- ・日本 1939年 第四次海軍軍備充実計画(④計画) 計80隻の建造開始
- ・米国 1940年 第三次ヴィンソン案 更に海軍力25%増強(議会で11%増強に抑制)
- ・日本 第5次海軍軍備充実計画(⑤計画) (第三次と第四次計画分合計に等しい建艦計画)
- ・米国 1940年7月 両洋艦隊法(スターク法) 海軍力70%増強 米国は決意した？
(太平洋・大西洋正面で日独に対抗し得る海軍力建設)
- ・日本 第六次海軍軍備充実計画を検討するも、実現不可能と思われた。戦力比が優位のうちに開戦した方が得策との判断も働いた。特に「翔鶴」「瑞鶴」制式空母戦力化時期は開戦時期決定に影響



2 日米海軍力推移(空母、戦艦、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦)

1項のような建艦競争を繰り返した日米だが、開戦後の海軍力推移はどうなったであろうか？

- ・開戦時 日：100.1万トン(237隻) 米：143万トン(345隻)
- ・ハワイ作戦直後 日：100万トン236隻 米：131万トン341隻
- ・M I作戦前 日：110万トン(236隻)、 米：147万トン、368隻
- ・M I作戦後 日：100万4000トン230隻、米：144万9000トン366隻
- ・ガ島作戦前 日：103万トン232隻 米：159万5000トン393隻
- ・ガ島撤退時 日：100万7000トン212隻 米：181万トン457隻
- ・米軍反攻前 日：99万6000トン208隻 米：285万トン661隻
- ・マリアナ沖海戦前日：98万2000トン186隻 米：318万8000トン734隻
- ・マリアナ沖海戦後日：90万2000トン182隻 米：N/C
- ・捷号作戦直前 日：87万9000トン165隻 米：352万2000トン 791隻
- ・レイテ沖海戦

投入戦力比較 空母 日×1 米×制式空母8、軽空母×3、米×8、+護衛空母も
母艦搭載機数 日×116機 米×1280機
戦艦 日×9 米×12 駆逐艦 日×33、米×71

損害数は涙ありて書けず 実質的に海軍力消滅

- * ランチェスターの二次法則を持ち出すまでもなく、戦力差が大になるほど小戦力側の被害が急激に増大する。その典型を見るようだ。米国の底力を思い知るばかりである。それにしても両洋艦隊法の時点で米国の決意は固まり、後は時間のみだった。

(第百十九話 了)